新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第三章（だいさんしょう）　宿命転換（しゅくめいてんかん）

三世の生命（さんぜせいめい）

かくのごとく巧みに立つといえども、いまだ過去・未来を一分もしらず。玄とは黒なり、幽なり、かるがゆえに玄という。ただ現在ばかりしれるにたり。現在において仁・義を制して、身をまぼり、国を安んず。これに相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等いう。これらの賢聖の人々は、聖人なりといえども、過去をしらざること凡夫の背をみず、未来をかがみざること盲人の前をみざるがごとし。

（005 開目抄

三世の生命51ページー3行）

妙楽大師云わく「仏教の流化、実にここに頼る。礼楽前に駆せて、真道後に啓く」等云々。

天台云わく「金光明経に云わく『一切世間のあらゆる善論は、皆この経に因る。もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり』と」等云々。止観に云わく「我、三聖を遣わして、彼の真丹を化す」等云々。弘決に云わく

「清浄法行経に云わく『月光菩薩は、かしこに顔回と称し、光浄菩薩は、かしこに仲尼と称し、迦葉菩薩は、かしこに老子と称す』。天竺よりこの震旦を指して、

かしことなす」

（005 開目抄

三世の生命51ページ－5行）

妙楽大師は「仏教の流布はじつに儒教の力をそのまま生かしたのである。儒教の礼楽（礼儀等の生活規範）が先に流布されて真の道である仏法が後に弘通されたのである」といっています。（中略）また同じ妙楽大師の止観輔行伝弘決には「清浄法行経にいわく、月光菩薩は中国に生まれて顔回といい、光浄菩薩は同じく孔子といい、迦葉菩薩は同じく老子とい

った。これらはすべて釈尊(しゃくそん)の使(つか)いとして、仏教(ぶっきょう)の先駆(せんく)として教(おし)えを説(と)いたものである」とあります。

我ら一切衆生、蠼蟻蚊虻等に至るまで、みな無始無終の色心なり。

（053 諸宗問答抄

三世の生命 775ページー3行）

自身法性の大地を、生死生死と転り行くなり（095御義口伝）

三世の生命1010ページ-15行

「已」とは、過去なり。「来」とは、未来なり。「已来」の言の中に現在は有るなり。

（095 御義口伝）

三世の生命 1049ページ-17行

我実成仏已来の已とは過去のことであり、来とは未来のことです。この已来という言葉のなかに現在はふくまれるのです。

「三界之相」とは、生老病死なり。本有の生死とみれば、「無有生死」なり。生死無ければ、退出も無し。ただ生死無きのみにあらざるなり。生死を見て厭離するを、迷いと云い、始覚と云うなり。さて、本有の生死と知見するを、悟りと云い、本覚と云うなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る時、本有の生死、本有の退出と開覚するなり。

（095 御義口伝

三世の生命 1050ページ-10行）

「無」も「有」も、「生」も「死」も、「若退（もしは退）」も「若出（もしは出）」も、「在世」も「滅後」も、ことごとく皆本有常住の振る舞いなり。「無」とは、法界同時に妙法蓮華経の振る舞いより外は無きなり。「有」とは、地獄は地獄のありのまま、十界本有の妙法の全体なり。「生」とは、妙法の生なれば、随縁なり。「死」とは、寿量の死なれば、法界同時に真如なり。「若退」の故に滅後なり、「若出」の故に在世なり。

（095 御義口伝

三世の生命 1050ページ－14行）

（「生死の、若しは退、若しは出有ること無く」の）無も有も、生も死も、若退も若出も、また在世も滅後もすべて遠い過去世よりつねに生命そのものにそなわる本来の姿、働きなのです。また無有生死の“無”とは、宇宙のあらゆる森羅万象がすべて妙法蓮華経の振る舞い以外の何ものでもないということであり、“有”とは、地獄は地獄のありのままということであり、もともと十界をそなえていること自体が妙法なのです。”生“とは、永遠に

常住する妙法を根底とした生ですから、いまはじめて生じたものではなく、もともとあるものが縁にふれてあらわれたものです。“死”とは、永遠の生命からみた死ですから、大宇宙それ自体となり、法界がそのまま妙法それ自体なのです。それは「若しは退」のゆえに滅後すなわち死となり、「若しは出」のゆえに在世すなわち生となるのであって、退くか出現するかの違いにすぎません。

凡夫(ぼんぷ)の血肉(けつにく)の色心(しきしん)を本有(ほんぬ)と談(だん)ずるが故(ゆえ)に、本門(ほんもん)とは云(い)うなり。

（095 御義口伝(おんぎくでん)

三世(さんぜ)の生命(せいめい)1113ページ-14行）

現世(げんぜ)に云い置(い)いおく言(ことば)の違(たが)わざらんをもって、後生(ごしょう)の疑(うたが)いをなすべからず。

（122佐渡御書(さどごしょ)

三世(さんぜ)の生命(せいめい)1286ページ－13行）

涅槃経には、父母・兄弟・妻子・眷属にわかれて流すところの涙は四大海の水よりもおおしといえども、仏法のためには一滴をもこぼさずと見えたり。法華経の行者となることは過去の宿習なり。同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし。仏なりとも権仏となるは、また宿業なるべし。

（280 諸法実相抄 三世の生命 1792ページ－13行）